

雪江の弟・新之丞が、老中の水野忠邦から謎の呼び出しを受けた。時を同じくして、異国船への発砲事件が発生する。その関係者に、雪江の元夫である「森高」の名があつた。

連作小説 3

礼をつくせば

出もどり雪江筆法指南

主な登場人物

●雪江

女流書家。嫁ぎ先の森高家から離縁され、実家の岡鳥家で武家娘相手の手跡指南所を始めた。

●新之丞

雪江の弟で、岡鳥家の当主。役者と見紛うばかりの美形男子。城内で奥右筆を務めている。

●巻菱湖

雪江の師匠で、江戸の三筆に讃えられる大物書家。大酒飲みで豪放磊落。門弟の数は一万人を超える。

梶よう子

濡れ縁で、髪結いの銀次が、新之丞の髻を結っていた。

銀次は新之丞の髪に鬢付け油を付け、丁寧に櫛で梳き、髻の形を整えていく。

新之丞は腕組みをして、目蓋を閉じ、口許をぐっと引き締めている。

鼻筋の通った、もともと端正な顔立ちをしている新之丞だが、なるほど、こうしてあらためて見てみると、精悍さもある。

新之丞の登城日に、どこからともなく屋敷の門前に集まる娘たちの気持ちもわからなくはなかった。

今朝もすでに一番手、二番手あたりが首を長くして待っているに違いない。

母の吉瀬から聞いた話によると、真冬の寒さの折には、玄関先まで娘たちを招き入れ、手焙りを出すのだという。では暑い最中はと、さらに雪江が問うと、

「団扇を配るのよ」

それがどうかして？ という疑問口調で返された。そうした細やかな気遣いに、娘たちの新之丞熱は、さらに高まるのであろう。

雪江は、腕を伸ばし、枝を切る振りをして、さりげなく新之丞を窺う。

やはり、今朝の新之丞は違う。いつもはもつと軽薄で、軽口ばかり飛ばしている。

それに、銀次のほうもまったく口を開かない。雪江に小さく会釈だけしたが、その後は真剣な眼

差しで、鬢櫛を髪にあてていた。

常なら、なにを話しているのか、隣室にいてもふたりの楽しげな声が聞こえてくる。なのに今朝はふたりとも、黙ったままだった。

少々薄気味悪くもある。

なにかお城でよくないことでもあったのか、それとも、喧嘩でもしたのかしらと、雪江が訝っていると、

「いいお日和ですこと。では雪江、母は出掛けて参ります」

晴れ渡った空を見上げながら、吉瀬が姿を見せた。後には、荷を抱えた茂作がいる。

「伯母さまのお見舞いですか」

雪江の言葉に母の吉瀬は不服げな顔をした。

「ええ、いささか心配なので様子を見てこようかと。でもねえ」

伯母は、吉瀬の姉だ。屋敷も近くなので、花見だ、芝居だとよくふたりで出掛ける。

だが、先日、木挽町にある河原崎座での芝居の帰り道、駕籠に乗り込もうとしたとき、ぬかるみに足を取られて腰を強く打ってしまった。

俯せでしか寝ることができない、はばかりに行くのがやっとだ、食欲もないなどと、幾度も文を寄越していた。

「昨日の文には、岡塾栄泉の豆大福が食べたいとあったのですよ。なにも喉に通らないと前の文には書かれていたのに」